

AIDS—当事者のちからが社会を変える

—ブラジルからの報告—

ジョゼ・アラウージョ・リマ・フィーリョ エイズ・アクティビスト

〔第29回文明研究所講演会〕
2013年11月29日

小貫 みなさん、こんにちは。今回の文明研究所講演会では、ブラジルからアラウージョさんに来ていただいて、エイズの話をお話していただくことになりました。

ブラジルって、実はエイズ対策で世界的に注目されている国なんです。ブラジルの大統領が国連で演説をするときには、自慢話として自国のエイズ対策を取り上げるほどです。ブラジルの人々が誇りに思うようなそんな取り組みが、どんなふうにして生まれてきたのかということ、今日はアラウージョさんにお話しいただきたいと思います。

また、通訳としては下郷さとみさんをお迎えしました（拍手）。下郷さんはジャーナリストとしてブラジルのエイズというテーマを追ってきた人で、アラウージョさんの人生についてもNHK テレビのドキュメンタリー番組に仕上げたりしてきた人です。彼女は、ほぼ毎年のようにアラウージョさんを日本に招聘して、全国各地をまわって一緒に講演をしています。これからもまだ長い旅がつづいて沖縄までまわるそうです。アラウージョさんは日本でも著名な人で、全国のNGOや大学などでたくさんの方が彼のお話を楽しみに待っているということです。では、下郷さん、よろしくお願ひします。

下郷 みなさん、こんにちは。小貫大輔先生とは旧いつきあいで、小貫さんに誘われてブラジル・サンパウロのスラムで2年間、ボランティアとして活動したのが私のブラジルとの出会いでした。私がアラウージョさんの日本講演ツアーを担当するようになってからは、もう10年以上になります。1994年に世界エイズ会議が横浜で開かれたときに、小貫さんが企画してアラウージョさんを招いて、それ以来、ほぼ毎年、彼は来日してきました。今年で18回目となります。

毎年、12月1日の世界エイズデーの時期にアラウージョさんを日本に招聘しているのですが、なぜこのような講演活動をしているのかといいますと、日本は先進国のなかでも唯一HIV感染が増え続けている国であるにもかかわらず、しかしなかなか有効な予防啓発対策がとられていない。エイズ関連の予算も削られる傾向にあり、世界エイズデーのキャンペ

ーンポスターなど、みなさんごらんになったことがないと思いますが、問題は進んでいるけれども対策は後ずさりしているという状況です。そんななかで、ブラジルの非常に進んだエイズ対策から学んでいきたいという、そういう目的がひとつあります。

もうひとつは、今日の講演でも民主主義や憲法という話題、市民が主体的に社会をつくりあげていく、そのような話題がたくさん出てくるんですね。つまり、単にエイズという狭い事柄ではなくて、社会にはいろいろな問題がありますが、それを当事者が中心になって市民が主体的にどんなふうにして社会を動かして政治を動かしていくのか、その一つの例をブラジルのエイズへの取り組みというエピソードからみなさんに知ってほしいと思うのです。日本では、もしかしたら将来憲法が変わるのではないかと、また市民の権利や自由、そういうものが制限されるような方向に動いている、そのような状況にありますよね。そういうなかで、では市民がどうやって社会を自分たちの手でつくっていかばいいのか、そういうことを、みなさんそれぞれの身に引き寄せて感じ取りながらアラウージョさんの話を聞いてほしいなと思っています。それではおねがひします。

（以下通訳を介して）

アラウージョ みなさん、こんにちは。今日はこうしてみなさんにお会いできてとてもうれしいです。まず、エイズは新しい病気で、30年ほどの歴史しかありません。私自身はHIVに感染していると判って28年になります。ですから私はエイズの歴史の生き証人です。このエイズという病の歴史を自分自身が生きてきた、そのことを今日は身をもってお話ししたいと思います。

ブラジルにおけるエイズへの取り組みは、世界的にもとても注目を集めてきました。エイズという病と共に社会全体が動き、さまざまな変革をもたらしてきた。その姿が世界中から注目されているのです。今日みなさんにお話しするのは、単にエイズということだけでなく、もう少し広い観点でとらえ

たお話です。私たちが行って来たエイズへの取り組みは、“Cidadania (シダダニア)”，つまり市民として一人一人が持つ権利を求める運動でした。この運動がどんなふうに社会を動かしてきたのか、その変革の道筋をお話したいと思います。

まずブラジルはどんな国か、どこにあるのか、そこからおさらいしていきましょう。ブラジルは南米大陸の大きな国です。ブラジルの北部はアマゾン地域で、世界でも最も人口密度の低い地域のひとつです。ここ（地図を指して）は南東部と言われているところ。今指しているところはサンパウロ州で、ブラジルでも最も人口密度の高い地域です。日本よりもひとまわりだけ小さい面積になります。このサンパウロ州の州都が、私が住んでいるサンパウロ市です。ブラジルは広大な国ですが、忘れてならないのは非常に社会格差が大きい国だということです。またブラジルは歴史の浅い国で、まだ500年あまりの歴史しかありません。日本は——日本の国はいったい何年歴史がありますか？ ……数千年の歴史がある国と比べれば、ブラジルは非常に若い国だといえるでしょう。

アジアの国々や日本とのちがいとしては、ブラジルは移民の国です。ヨーロッパのさまざまな国から移民がやってきた。またアフリカ大陸からは奴隷がつれてこられたわけで、そういったさまざまな国や地域の影響を受けてできています。また、日系の移民の人もとても多いですし、最近では中国系移民の人も増えています。このように世界でも最も人種的な多様性に満ちた国だと言われている。ブラジルに行ったことのある人、手を上げてみてください。……ブラジルに行ったことのあるかたはブラジルがいかに多様性に満ちた国かということに気がつかれたと思います。

1980年代に軍事政権が終わり、新憲法で「健康権」が定められたブラジル

ブラジルにエイズという病が入ってきたのが1980年代の初めです。診断第1号が83年ですけれども、初期のころはブラジルで感染が急激に拡大しました。WHOはその状況を懸念しました。

ところでエイズがブラジルに入ってきた頃というのは、ちょうど軍事政権が終了して民主主義が始まってきた頃に重なるんですね。そして軍事政権の終了に伴って新しい憲法がつけられました。市民が参加して、新しい民主的な憲法をつくりあげていくというプロセスが今から30年程前にあったのです

が、私自身もそういった動きに参画しました。みなさんのなかで日本国憲法の本を持っている人はいますか？ 家に置いてある人？ ……憲法というのはとても大事なものですよ。その国の魂とも言えると思います。

1988年に発布されたブラジルの新しい民主憲法の中には、健康について触れている条文があります。民主化以前の時代、人びとが病気になった際にどのようなサポートがあったのかというと、貧しい人は医療が受けられない、つまりお金がなければ病院に行くこともできない、キリスト教会が運営している慈善病院のようなところで世話になる、そういった状況でした。そして新しい民主憲法の中に、健康に関する条文が盛り込まれました。そこにはこう書いてあります。「健康はすべての人の権利であり、それを保障するのは国家の義務である」。こうして憲法に健康への権利ということが盛り込まれました。

しかし、ただ盛り込まれただけでは、それは紙に書いてある抽象的なものにすぎません。そこで憲法に書かれた精神を具体的な形にしていくということが求められます。そこで同年、1988年に創設されたのが公的医療制度です。

下郷 補足説明をします。ブラジルの公的医療制度は、日本のような保険制度ではありません。日本の保険制度は、保険に加入し、収入に応じた額の保険料を支払い、保険証を提示することで3割なりの自己負担額で医療を受けることができる、という制度ですね。しかしブラジルの公的医療制度では、加入の必要も保険料を支払う必要もありません。「すべての人の健康を保障する」ということで、だれもが公的医療機関に行くだけで無料で治療を受けることができる、というものです。しかし制度というのは実際の運用の中身が問われるわけです。初期のころは公的医療制度のもとでは、軽いけがや軽い疾病などの簡単な治療しかカバーしていませんでした。

憲法を盾に「無料で治療を受ける権利」を勝ち取っていったエイズ患者たち

アラウージョ こうして憲法が発布され、それに基づく公的医療制度ができました。そのころと時を同じくして、ブラジルではエイズ禍が非常に拡大して、しかもまだ治療薬が存在しなかった時代ですし、どんどん人が死んでいくという状況で

した。小貫大輔先生はちょうどその80年代の終わりぐらいにブラジルで活動されていて、治療薬がないことでたくさんの方が死んでいく状況をごらんになったはずです。当時の私たちの共通の友人が今どうしているかという、ほとんどが死んでしまって2人しか生き残っていないね、という話を今朝も小貫さんとしていました。初期のころは男性の同性愛者のあいだで病気が非常に広がっていました。軍事政権時代、同性愛者はとても迫害されていたのですが、民主主義がもたらされてから、男性同性愛者の人たちが自身で団体をつくり、この病気に立ち向かうという動きが出てきました。保健行政と協働しながら運動をつくりあげていこうという、そういった動きです。

この写真の女性はナイール・ブリットさんといって私たちの仲間です。1996年に彼女はエイズを発症して危篤状態に陥りました。当時、画期的な新薬が海外で発表されたところでした。しかしブラジルでは手に入らない。そこで彼女を救いたい、仲間たちと知恵をしぼりました。政府を裁判で訴える——薬をよこせ、と、憲法の「健康はすべての人の権利であり、それを保障するのは国家の義務である」を政府は守れ、と、そのような裁判闘争を行いました。で、この訴訟は勝ったのです。判事いわく「憲法は守らなければいけない、当たり前のことだ」と。この裁判が初めての——紙に書かれていただけだった「健康はすべての人の権利であり、それを保障するのは国家の義務である」という精神を具体的な形にした初めての判例となったのです。

そして裁判に訴えるだけではなく、みなで路上に繰り出してデモを行いました。今お見せしている写真は最近のものですが、今でもこんなふうに抗議行動を行っています。原告第一号のナイールさんが勝訴してから1カ月のうちに、全国で500件近い同様の訴訟が行われました。つまり政府に対して薬をよこせと、国の義務を果たせと、そのような訴訟運動を繰り広げたのです。そしてすべて勝訴しました。こうして訴訟運動を繰り広げ、デモも行い、やがて国会が動きました。エイズ治療も無料の公的医療制度に組み込む、ということが国会で決定した。それが同じ1996年の末のことです。こうして治療を必要とするすべての人がエイズ治療を無料で受けられるようになりました。

ここで気づいてほしいことがあります。憲法には“すべての人の健康を保障する”と書かれています。公的医療制度の受

益者は、“すべての人”つまりブラジル国籍者に限らないわけです。つまりブラジルに住んでいる人は誰でも、外国籍の人でも、ビザを持たない不法滞在の外国人もすべて、無料でエイズ治療が受けられることになりました。エイズ治療はとて高額です。ブラジルに行ったことのある人ならおわかりでしょうが、ブラジルはけっして豊かな国ではありませんし、このような高い治療の無料化を維持するのは不可能ではないかと、当時、国際社会は懸念したりもしました。

こうして、すべての人に無料で治療を提供するということで、ひとつ解決の道が拓かれたわけです。そして、ほかのさまざまな疾病の患者団体が「後に続け」と立ち上がり始めました。当事者、市民が声を上げたことで、これまで公的医療制度がカバーしていなかった治療が、次々と無料化されていきました。

エイズの予防は人権尊重から

さて、エイズ対策ではもうひとつ重要な点があります。それは予防です。1980年代の終わりから90年代の初めにかけて、ブラジルでHIV感染が非常に拡大していた時期に、WHOが「このまま感染が拡大し続ければ、西暦2000年にはブラジルにおけるHIV感染者は120万人を突破するだろう」という予測を出しました。当時、HIV感染がたいへん広がっていたころのブラジルの社会状況はどうだったかという、まず性についてオープンに語るというような文化がありませんでした。またコンドームを使う習慣がほとんどありませんでした。私自身もHIVに感染するまではコンドームを一度も使ったことがありませんでした。つまり感染が広がって当然な状況にブラジルはあったわけです。

こういった状況のなかで、どのような対策がとられていったのでしょうか。まず感染のリスクに対して、より脆弱な状況におかれている人たちのグループというものがあります。HIVについていえば、初期のころは男性同性愛者たちのあいだで感染が広がりました。それで政府は、HIVの感染リスクに対してより脆弱な人々をエンパワーメントして、当事者自身が予防に取り組める力を養っていくという対策に乗り出しました。ブラジル社会全体がこの病に対する予防に乗り出していったわけです。初期のころ感染が広がっていた層——男性同性愛者のほかにも女性のセックスワーカーの人たち、そういう当事者自身が組織を立ち上げて主体的に予

防に取り組むという動きが生まれてきました。

ここまで、治療の面と予防の面での取り組みについてお話ししてきましたが、もうひとつ、ブラジルのエイズ対策のとても重要な点は“人権”です。エイズ対策に限らず、何に対する施策にも“人権”という観点が欠かせません。エイズ対策においても、つねに人権の観点とともに様々な取り組みが行われています。これは他の国と比較しても非常に特徴的なことだと思います。

では、予防啓発において人権を尊重するとはどのようなことかという、それは、必要としている人のもとにメッセージがきちんと届く、それがその人の権利を守ることにつながる、という考え方です。ですから、広く万人に向けたキャンペーンということはブラジルではありえません。焦点と対象を絞りこんで、この人たちにこのようなメッセージを届ける、そういう焦点と対象を絞りこんだ非常に具体的なキャンペーンが行われています。

少し話が戻りますけれども、当事者がみずから組織化して主体的に取り組んできたという成果のひとつの例をご紹介します。この写真はセクシャル・マイノリティのプライド・パレードです。世界最大の規模を誇るサンパウロのプライド・パレードの様子です。350万の人がサンパウロの目抜き通りを埋めつくしています。セクシャル・マイノリティの当事者だけではなく、その家族や友人、職場の同僚など、ほんとうに大勢の人がセクシュアリティの多様性を尊重しようという意思をもって集まっています。

以前は、男性同性愛者をはじめセクシャル・マイノリティの人たちは社会から偏見の目で見られ、社会から身を隠すようにひっそりと生きていました。つまり社会から見えない存在になっていた。そのような状況にあるマイノリティの人たちは自己肯定感が低下し、自身の健康を大切にしようという意識も低下しがちになります。また情報も届きにくくなり、結果として予防が進みません。こうして感染が拡大してしまうという状況にありました。だからこそ、こうやって自分たち自身で社会の中へと出ていって、見える存在になっていく、そういうことが非常に大切です。

ブラジル政府のエイズ・キャンペーン

ここからいくつかブラジル政府の制作による実際の予防啓発キャンペーンポスターをお見せしましょう。これ(ph1)は

ゲイ＝コミュニティに向けてのキャンペーンのひとつです。もちろんゲイの人たちも家族はいるわけで、マイノリティであるセクシュアリティを持った——それは息子であったり娘であったりするわけですが、そういった家族同士の関係性みたいなものを描いているポスターです。このポスターに描かれているのは親子、父と息子です。

ブラジルはマチズモの強い国で、たとえば息子が同性愛者だということを受け入れられない親も多い。それこそ家から追い出されてしまうようなこともあり、それっきり家族と断絶して一人で生きていかねばならない、そういう人はまだまだ多いです。ですから誰にも、家族にも言えずに一人で苦むといった状況があります。これは、そのような状況を変えていこうという啓発ポスターです。

このポスターに描かれているのは父と息子で、書いてある言葉は「おまえのボーイフレンドとはちゃんとコンドームを使うんだぞ。そういう会話が父と息子のあいだにあってもいいじゃないか」というものです。ポスターだけでなく、同じテーマにもとづいたCMもつくられて、テレビのゴールデンタイムに政府の公報CMとして放映されました。

また、ほかにもかなり力を入れて行われているキャンペーンとしては、若い世代、ティーンエイジャーを対象としたものがあります。ブラジルでは性行動が始まる年齢がとても低いということがありますので、そういった意味で、若い世代に向けた重点的なキャンペーンが行われています。これ(ph2)はカーニバル・シーズンに向けてつくられたポスターです。モデルを務めているこの女性はティーンエイジャーにとっても人気のある歌手です。このポスターは学校内に貼り出されました。手にコンドームを持っていますね。包装から出したむき出しのコンドームを手を持っています。そして「次のカーニバルでは、おとなになったってことを見せるときよ。ちゃんとコンドームを使って責任ある行動を示そうよ」、そんなメッセージがこのポスターに表されています。

これ(ph3)はもう少し年齢が上の若い層に向けたカーニバル・シーズンのキャンペーン・ポスターです。やはりここでもコンドームがアイテムとして使われています。袋に入った状態ではなく、外に出ています。また、さきほども触れた人種的な多様性にももちろん配慮しています。白人の人が登場するバージョンもあれば、アフリカ系の人のバージョンもあると(ph4)、そういうことにもちゃんと配慮をしてポスターがつく

られています。

これ (ph5) も若い世代に向けたキャンペーンです。若者はそれぞれ服装の好みがいろいろあるけれども、共通して身につけるもの——それはコンドームです、と若い女性がこうやって手にコンドームを持っていますね。これ (ph6) はロマンチック路線で、カップル向けのポスターですけれども、書いてある言葉は「愛ある人は使います」です。ポスターという手法だけでなく、路線バスのリアウインドウにキャンペーン広告が掲示されていたりもします。そしてみなさん思い返してほしいのですが、セックスというのは若い人たちだけのものではないですよ。中高年の人たちにも、もちろん性生活があります。これ (ph7) は 50 歳代以上の性生活がある人たちに向けて行われたキャンペーンです。

ぜひ気がついてほしいのですが、今まで見てきた何枚かのポスターでもそうでしたが、ここでもコンドームを持っているのは女性ですよ。必ず女性の手にコンドームがあります。これは女性のエンパワーメントを意図して、あえて女性の手にコンドームを持たせる、そういうポスターをつくっているのです。避妊にしても感染症の予防にしても、コンドームを持って歩くのは男性だけの務めだと、そういう考え方があります。いや、そうではなくて、女性が主体的に自身のからだを大切に予防に努めるという意識をぜひ持って行動に移してほしいという意図をこめて、女性の手にコンドームを持たせるポスターをつくるのです。

また、年間を通し、さまざまなシーンに応じてさまざまなキャンペーンが行われています。これ (ph8) は、やはり訴える対象がきちんと絞られており、これはヘテロ=セクシャルのカップルに向けたポスターですね。女性のほうは白人系の人ですけれども、男性はアフリカ系で、人種的な多様性を尊重していることに気がついていただけたと思います。こちらは同じシリーズのポスターですが (ph9)、もちろんゲイのカップルに向けてメッセージを届けるバージョンもちゃんとつくられています。〈ブラジル〉と右下に書いてありますが、これはブラジル政府のロゴマークです。今までお見せしてきたのはすべてブラジル政府制作のキャンペーンです。

次にお見せするこちら (ph10) は、数年前の世界エイズデーのキャンペーンポスターです。HIV とともに生きている人はたくさんいるわけですが、それぞれが普通の市民生活をおくっているんだと、恋人がいたり配偶者がいたりする。自

分は HIV に感染しているけれど、パートナーは感染していない、今はそういうカップルがたくさんいます。そうやって HIV とともに生きていくことは可能なんだ、偏見をなくしてともに生きていこう、というメッセージが込められたポスターです。書かれている文字はこうです。「二人のうちの一人は HIV を持っています。そのことをもう一人はちゃんと知っています。エイズとともに生きることは可能です。しかし、偏見のある社会では、それは不可能です」。

このポスターと合わせてつくられ、テレビで放映された政府公報 CM があります。そのビデオもお見せしましょう。

下郷 ポルトガル語の字幕が流れますので、先に少しだけ解説しますと、ビデオにはポスターと同じように男女 2 人が登場します。字幕はこうです。「彼は HIV を持って 5 年になります。そのことを彼女はちゃんと知っています。彼はこれからも HIV とともに生きていくし、彼女はこれからも HIV に感染せずに生きていきます。エイズとともに生きることは可能です。しかし偏見のある社会ではそれは不可能です」——このようなメッセージです。なお登場する二人はモデルや俳優ではありません。彼のほうは HIV 陽性で、彼女のほうはネガティブだという、本当のカップルです。(ビデオを流す)

アラウージョ これは世界エイズデー前後の 1 週間、テレビのゴールデンタイムに政府の公報 CM として、すべてのチャンネルで放映されました。

有効なキャンペーンというのは、もちろん市民社会が声を上げて「こういう有効なキャンペーンをつくれ」と政府に求めてこそできるものです。今日お見せした数々のキャンペーンも、市民と政府の共同作業で実現してきた結果です。

ここから何枚か過去数年分の、日本政府による世界エイズデーのキャンペーンポスターをお見せしましょう。最後に今年のものも入っています。(ph11-14) ……。これ (ph15) が今年のポスターです。

ブラジル政府のキャンペーンポスターと日本政府のキャンペーンポスターで、何か違いを感じましたか？ もちろん日本とブラジル、それぞれ異なる文化的な背景があるわけで、それは考慮に入れなければなりません。しかしそのような文化的な背景はあるにしても、ある深刻な病気に対してどう取り組むべきかを考えたときに、両者の間にある違いというも

のが浮き彫りになってくるのではないのでしょうか。

エイズ予防が進むブラジルの社会

ブラジルでは最初からこうだったのかというと、もちろんそうではありません。さきほども言いましたように、コンドームは全く普及していませんでした。昔、セアラ州のカノア・ケブラーダという小さなまちで小貫さんと語り合ったことを思い出します。そのとき小貫さんは「ブラジルでもいつか日本のようにコンドームが当たり前になったらいいのにな」ということを言っていました。それから20年近く過ぎた今、ブラジルでは、街なかのそこかしこにコンドームが当たり前のように存在しています。包装の仕方ですが、箱には入っていません。ドラッグストアやスーパーのレジのところで、個包装がつながったかたちでブレンダーとぶら下げて売っているんですね。すぐそこに目に見えるかたちでコンドームと出会うことができます。

たとえば、若い女性がハンドバッグの中のカギかなにかを探していて、はずみでコンドームが床にポトンと落ちてしまった。周囲の人はそれを見て特に驚きもせず、「あ、コンドームね」みたいな感じで受け止める。そういったことが、ありふれた風景となりました。

さきほど、ブラジルで HIV 感染がすくなく広がった時期に、ある予測を WHO が出したとお話しました。「このまま感染が増え続ければ、ブラジルは西暦 2000 年には感染者の数が 120 万人にまで膨れるだろう」というものです。1990 年代の初めに WHO が出した予測でした。今現在 2013 年ですが、ブラジルの HIV 感染者数は、およそ 70 万人です。さまざまな取り組みが功を奏して感染拡大を押さえ込むことができました。

学校教育の現場でも性教育が積極的に行われています。エイズ予防教育も含めてです。性教育ではコンドームについても普通に語られます。実物を使った授業も行われていて、配布もされていますし、学校におけるコンドームの存在がごく当たり前になっています。

私が代表を務める NGO では、サンパウロの 2 か所のスラムで 15 歳から 17 歳のティーンエイジャーを対象とした性教育プロジェクトを実施しています。毎週末に 1 回、4 か月間連続のワークショップ形式の講座です。保護者の許可を得たうえで行っていますが、保護者も非常に熱心で、子どもたち

に対する性教育の大切さをよく理解してくれています。この写真は、ある日のワークショップの様子です。連続講座で取り上げるテーマは、セクシュアリティであったりセックスであったりエイズであったり、あと、シダダニア（市民として一人一人が持つ権利）についてなど、さまざまなことを取り上げます。

この写真の回は、異性のからだを知ろうというテーマの授業でした。男女に分かれて、女子のグループでは、男性の性器はどういうものなのかということのみなで話し合い、図画工作のようにこうやって作って発表しました。これは男子グループです。女性の性器はどんなだろうと、女子たちに教えてもらいながらこうやって作りました。みなで話し合ったことを、作った模型を示しながら発表して、たとえば男子の発表に対して女子がさまざまなコメントをするんですね。そうやって男女の間で、からだをめぐることについて互いに誠実な対話をしていくという、そういったワークショップでした。

今日の私の話を通してご理解いただけたと思いますが、このように私たちは、状況をよりよく変えていこうという取り組みをさまざまに行ってきたわけです。

みなさんの中で HIV 抗体検査をしたことがある人はいますか？ ……そうですか。ブラジルでは HIV 検査は広く一般に普及していて、15 歳以上の人口のおよそ 50 パーセントの人が、少なくとも 1 度は検査を受けたことがある、とされています。

このことに関連して、私の NGO で取り組んでいる、もうひとつ別のプロジェクトをご紹介します。検査を気軽に受けましょうという、そういうプロジェクトです。この写真はトレーラーですけれども、内部をラボラトリーに改装してあります。いわば移動検査所です。男性同性愛者で、なかでも貧困層の人たちのあいだで HIV の感染が広がっているという現状があります。自発的に自身の健康を守るという意識を高めて検査を受けに行くということがなかなかできない層であり、そのような人たちのあいだで HIV 感染が広がっているという現実があるわけです。そこで、彼らが集まりやすい場所にこのトレーラーで出かけていって、検査を受けましょうということ呼びかけるというプロジェクトです。これは採血の 20 分後には結果が出るという迅速検査です。サンパウロ市の中心部にゲイの人たちが週末に多く集う地区があるのですが、地区の広場にこのトレーラーが横付けされると、このように検査

を受けたい人たちの行列がすぐにできます。

このプロジェクトはひとつの例ですけれど、みなで気軽に検査を受けましょうというキャンペーンを NGO も行っているし、また政府も熱心に行っています。今年のブラジル政府の世界エイズデーキャンペーンのテーマは“検査をもっと受けましょう”というものです。2020年までに検査を受けたことのある人が100パーセントに達するように——健康管理のひとつとしてみな検査を受ける、その目標として100パーセントという数字を掲げています。

シダダニアを求めて立ち上がる市民

ブラジルはまだまだ貧しい国で、社会格差が非常に大きな国です。そのような困難をかかえている国なのに、なぜこんなに成功することができたのでしょうか。ブラジルはサンバの国、サッカーの国、ということで有名ですけれども、しかしブラジルというのは、常に人びとが現在のあり方を問い直し続ける、そういう国民性のある国だと思います。たとえば今年6月にブラジル各地でたいへん大きな政府抗議デモが繰り広げられたことをご存じかと思います。日本のテレビなどでも報道されたはずですが、この、ブラジル全土に広がった大規模抗議デモも、発端というのはごく小さなことからでした。サンパウロで市が運営するバス会社が路線バスの運賃を20センターボ——日本円にすればわずか10円ほどかと思うのですが、値上げすると発表し、それに反対するデモが行われた。それがそもそもの始まりでした。この反対デモを始めたのは大学生、つまり若者たちだったんですね。フェイスブックなどで呼びかけて、よし反対デモをしよう、と路上に出た。それが発端です。

最初のデモは200人くらいから始まりました。それで警察がそれを抑え込もうとした。そのことに反発してさらに人が増え、2回目のデモでは2000人になりました。若者たちはネットを駆使してさらに広く呼びかけ、その次は3万人と、そうやってどんどん人が膨れ上がっていったわけです。またそれを警察が抑え込もうとしてデモに参加する若者を殴りつけたりなど、そういった衝突があった。それに怒りを覚えた人たちがさらに新たに立ちあがり、どんどん膨れ上がってブラジル全土に拡がりました。サンパウロでは200万人の規模に達しました。リオデジャネイロでは300万人のデモが行われました。最初は「20センターボの値上げ反対」から始まったわけ

ですけれども、これだけの規模に膨れ上がったというのは……一人ひとりが自分の中で抱えていた政府に対する不満や批判、そういうものを持ち寄って、みんなが路上に出たんですね。一人ひとりが抱く意見を、みんなが路上に出て訴えたわけです。私もデモの中にいましたけれど、誰もがみな、それぞれのメッセージを書いた紙をこう、掲げていました。「政治の腐敗をなくせ!」と書いた紙を掲げる人、「シダダニア(市民として一人ひとりが持つ権利)を守れ!」と書いている人もいました。「愛する権利を守れ!」と訴える人もいました。セクシャルマイノリティの権利を守れ、という訴えです。

来年ブラジルではワールドカップが開かれますね。全国で豪華なスタジアムが建設されているわけですが、それに一体いくら税金が使われているのか。そのことに怒りを表明する市民もたくさん出てきました。ブラジルというとサッカーが大好きで、誰もがサッカーを愛する国なのに、それでもこうやってワールドカップに反対だというメッセージが路上にはたくさん掲げられていました。

先日、別の大学で同じような講演を行った際に、ひとりの女子学生からこんな質問を受けました。怒りが自分の中に湧いてきたときに、その怒りをどう処理すればいいのでしょうか。そういう質問でした。私は、社会に対する怒り、そのような感情をただ自分の中に貯めこめば、自分自身が苦しくなるだけでは、という話をしました。ブラジルのこの6月の大きなうねりの中で、若者たち一人ひとりが、自分の中に抱いた疑問や怒りを路上に出て外に向かって表現するということを行いました。それがこのような大きなデモに繋がっていったのですが、若者たちが路上に出て自分の意見をそして怒りを外に向かって表現する姿を見て、私はとてもうれしくなりました。

では、私がお話をするだけではさみしいですので、ここからはみなさんの声を聞く時間にしたいです。ご質問はもちろん、感想でもけっこうですので、お聞かせいただければと思います。

聴講者 こんにちは。きょうはすてきな講演をありがとうございました。先日(NHKのドキュメンタリー番組の)VTRを見せてもらいまして、毎回の活動状況でのたくさんのいい面を見せてもらいました。ただ、ちょっと古いものだったので、検査結果の数値なんかもVTRで語られていましたが、いま現在飲んでいる薬とかその量とか、それから検査結果の数値

はどのように変化しているのかなどを知りたいんですが…….

アラウージョ あのドキュメンタリー、よかったですか？
(笑)

聴講者 ええ、よかったです。

アラウージョ ありがとうございます。あれはいつの放送でしたかね。

下郷 1999年ですから14年前ですね。

アラウージョ そうですか、あれが作られてから今までいろいろなことがありました。たとえば、じつはがんを患いました。

聴講者 え、ええー！

アラウージョ 化学療法を受けて、副作用でよろよろとしか歩けない状態で、本当にこのまま死ぬかと思ったんですけども、復活しました。ごらんとおり元気に回復しました。もちろん、ドキュメンタリーにも出ていたように、今でもエイズの治療薬は服用しています。またドキュメンタリーのなかで、免疫の状態を示すCD4の値の検査結果を見て、少し上がったと喜んでいたシーンがありましたが、今はCD4が480くらいです。すごく高くはないけど、まあそんなに心配するほど低くはないという感じですね。上下しつつも今はこういう状態です。ボクって元気だよー、とよく自分で言っていますけれども(笑)。

HIVに感染していると知って28年ですし、エイズという病気自体の歴史がまだ30年ちょっとしかないわけですから、私は世界で最も古いHIV感染者の一人だと言えるかもしれませんね。初期のころの人は既に亡くなってしまった人が多いですから。ずっと闘いつづけてきて、がんにもなりましたし、これからもまたいろいろと病気にかかってしまうかもしれない。しかし、怖いとかではなくて、それに立ち向かっていくんだという、そういうことに自分の中でなにか準備ができているという気がするんです。つねに生きることに對して闘いつづけていくという、私はそういう人間です。

私と同じ時期にHIVに感染した仲間たちはもうほとんど死

んでしまって、今はもうそんなに残っていませんし、また数年前にがんにかかった時、同じ病院で一緒に治療を受けていたがん患者の人たちも、多くが亡くなってしまいました。で、自分だけがこうやって生き残っていると。やはり私は生きることが好きなんです。生きることを愛しているし、だからこそ闘う。そして、闘うことが好きです。

聴講者 いやあ、答えと一緒にすてきな笑顔もありがとうございました。

聴講者 すてきなお話をどうもありがとうございました。日本はほんとにブラジルに比べたらエイズに対して対策も全然ないし、まず政府自体が——たとえばポスターにしても、ブラジルのポスターはけっこうリアルなポスターですけど、日本のはちょっとこう、何かを隠してるんじゃないけど、ちょっと保守的だなーと比較して思いました。日本では、政府を変えていくためにはどうしたらいいか、あ、ブラジルは変えられたじゃないですか、日本はどうすればいいかなど……。

アラウージョ 今のご質問を聴きながら、ブラジル政府の初期のころのキャンペーンポスターのことが頭に浮かんできました。とても大きなサイズのポスターで、そこにあることばが書いてありました。「エイズは死の病だ」と。それを見た私たちは、夜中にペンキを持って街に出て、貼られたポスターにそれを投げつけて、塗りつぶしてしまいました。これは、さきほどお話した、自分の中に目醒めた怒りというものをご表現するかということの、ひとつの例だと思っんです。社会に対するなんらかの怒りがある。ただ座りこんで怒っているだけでは何も変わらないわけで、それを一歩外に出て、なんらかのかたちで具体的なアクションにしていって、それが社会を変えていく力になるのだと思います。

日本で、ブラジルの現在のキャンペーンポスターをお見せしたり、ブラジルではコンドームがこんなふうに当たり前に見えるかたちで売られている、配られているというお話をしたりすると、「いや、ブラジルと日本は文化が違うから」と、そういう感想を持つ人も多いんです。そうやって文化の違いという概念に逃げ込んでいるのではないかと、そういうことを感じます。しかしブラジルでも、たとえばコンドームに対する人びとの印象は、以前は非常にネガティブだったんです。

まったく普及していなかったし、私自身もコンドームを生まれて初めて自分で買ったというのが30歳のとき—— HIVに感染しているとわかって2年後でした。

ブラジルでも以前はコンドームを使うことや、手に取ったり、持って歩いたりすることは、何かこう、けがらわしいというか、いやらしい人だ、というようなイメージがとても強かったのです。私は HIV に感染したことがわかって2年間は病気を受け入れられなくて、誰ともセックスできませんでした。それで、そろそろというふうになったときに、ではコンドームを買いにいこうと決意して、ドラッグストアに行って、店員さんが女性だったので入ってそのまま出てきたと……。 (笑) で、2軒目も女性だったのでそそくさと出ていって、何軒もまわってしまいました。 (笑) で、何軒目かに男性の店員がいたので、「コンドームをください、ちょっとおじさんにたのまれたので」と嘘をつきました。 (笑)

政府というのは政治を実行する、そういう役割を担っているわけですね。ではどのような政治を行えばいいのか、それを決めるのは一人ひとりの市民です。ですから、政府に対してこんな政策を行え、と、私たちはこのような政策を求めているのだ、ということを決めてそれを声に出すのは市民の役割です。ですから、もしみなさんが日本のキャンペーンポスターを見て、これでは全然ピンとこないと思うのであれば、「いや、こういうキャンペーンでは伝わりません」ということを政府に言っていかなければならないんです。みなさんのような若い人たちが、こんな子ども扱いされるのはごめんだと、ちゃんとひとりの大人として扱ってほしいと感じるのであれば、きちんと大人に向けたメッセージを自分たちに送ってほしいということを、政府にぜひ声を出して伝えてほしいと思います。

聴講者 ありがとうございます。

聴講者 すみません、すてきなお話ありがとうございました。私は小貫先生の授業を通して HIV とエイズのことを勉強しているんですけども、実際に HIV とエイズという病気についての勉強はできても、陽性者の方からの話を聴く機会がなかなかなかったので、とても今日は楽しみにしていました。アラウージョさんが HIV に感染してエイズがアラウージョさんを変えさせたものとか、HIV によって何か大きく変わったものがあれば教えてください。

アラウージョ すべてが変わりました。人は必ず死ぬものですが、しかし自分はいつまでも生きていたつもりでいたんですよ。まあ、若いころというのはそういうものだとは思いますが……。命はいつまでもあるものだと思っていたころは、周りがあるいろいろな問題に気がつかないでいたし、また、そんなに急がなくてもいい、そういう気持ちでいました。ところが、HIV に感染していることを知って、人間は死ぬんだ、いつかは……ということに気がついたんですよ。いかに生きるということがすばらしいことか、そういうことに HIV は気づかせてくれました。以前は怠惰に時を過ごしていました……。自分は生きているんだということを意識もせずに生きていました、そんな日々を過ごしていたわけですけども、HIV に感染していることを知った時、それから数年前にがんにかかった時、自分はいつかは死ぬんだということを思い知らされてからは、生きるということに集中して取り組むという、何かそういうふうに分身の中で変化があったんです。24時間集中して生きる。一秒一秒を生きていく。そういう力が社会を変えていく、そしてまた闘っていく力にもなるのだということを実感しています。

聴講者 オブリガード……。あの、私ブラジルのファベラで半年間ボランティアをさせてもらったことがあって、そこで幼稚園で3歳半から4歳の子のクラスで働いていました。約20人ちょっとくらい子どもがいたんですけど、3歳半、4歳ってまだちゃんとしゃべれるようになったぐらいなのに、クラスの中で、私がほんとに思い出だけでも涙が出そうになるくらい性的な問題が子どもの中にありました。子ども同士の間にもあって、いろんなトラブルが起きたんですね。そのときに私は家庭内の性教育であったり、親の環境であったりというのにすごく疑問を持ちました。それでさっき写真で HIV 検査のトレーラーを見て、そういうトレーラーをファベラとかに持って行って、地域の中で人を集めて性教育をするであったり、子どもを持つ親に対して子どもも含めての性教育をすることができれば、すごくいいなと思ったんですけど、どう考えますか？

アラウージョ ファベラは都市にあるスラムのことです。ファベラはさまざまな問題が渦巻いている場所で、今おっしゃったような、そういう問題のある家庭も多いでしょう。政

治的に目醒めた人ももちろんいるでしょうし、いろいろな背景を持つ人が暮らしています。ブラジルにはさまざまな社会運動が存在しますが、ファベラにおける住民運動という、非常に力強い社会運動というものもあります。さきほどトレーラーの移動検査所をご紹介しました。あそこに検査を受けにくる人の大部分がファベラに住んでいる若者です。セクシュアリティやセックスをめぐる問題というのは一人ひとりがかかえている問題であって、ファベラだからこそその問題とも言い切れないのですし、このような問題は、とても慎重な立場で取り組むべきだと思っています。

ファベラの幼稚園で小さい子どもたちが性的なことをいろいろ話している、そういうことでしょうか？ ファベラの文化として、すべてをあからさまに、おおっぴらに表現するというようなところがありますよね。ですから子どもたちもセックスということについて、ただおおっぴらに表現しているだけという面があるかもしれない。もしかすると、逆に、ファベラに住んでいないほかの子どもたちも、ほんとうは内にかかえている問題は同じだけれども、それが外に出てきていないだけかもしれない。また日本の子どもたちも、もしかすると外に出てきてはいないけれど、内面にはいろいろな問題をかかえているかもしれない。そういうデリケートな問題だと思えます。

セクシュアリティをめぐることからは、「自分のなかでは解決済み」なんてことはありえないんですよ。私自身もこのような活動をしているので、友人たちにセクシュアリティの面では全然悩みなんでないんだろう、と聞かれることがありますけれども、でもそんなことは全然ないんです。ほんとうに一人ひとりのなかに、いろいろな問題を抱えているわけです。

ファベラの子どもたちは、セックスやセクシュアリティの問題以外でも、たとえば父親がアルコール依存症であったり、また父親がいないとか、どこかへ行ってしまって不在であるとか、そういうさまざまな問題をかかえているわけです。でもセクシュアリティの問題についていえば、おおっぴらに外に出すという文化がファベラにはあるので、中産階層の子どもたちと比べると、成長するに従ってそのあたりのことは、なんというか、ファベラの子どもたちはスッキリしているんですね。豊かな家庭の子どもたちのほうが、内にもったまま大きくなってしまおうといった部分が見受けられます。

さて、何度もこうやって日本へきて学んだことのひとつが、

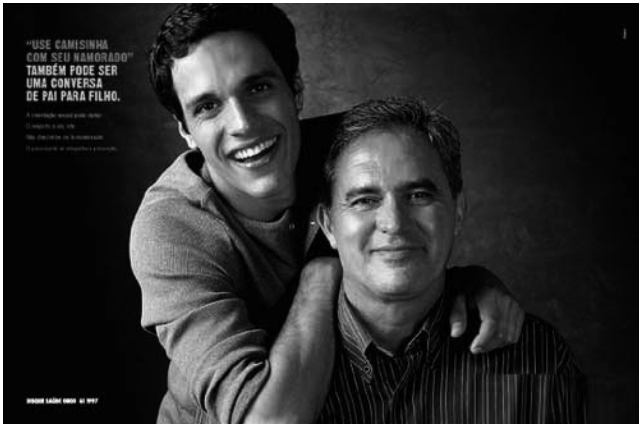
日本には時間をきっちり守る文化があるということです。(笑) ブラジルでは全然そんなことはありませんので。もう時間がきてしまいました。みなさん今日はほんとうにありがとうございました。

小貫 アラウージョさんそして下郷さとみさん、どうもありがとうございました。(拍手) あの一、最後に一言だけ自分も言いたくなっちゃったんですけど。ぼくは25年前に初めてブラジルに行ってボランティアしていたときに、ひどく身体をこわしました。25年前のブラジルというのはエイズがどんどん増えていたときで、自分もエイズになったと思ってすごく怖かった。だってエイズの仕事をしていると、まわりの人はみんなHIVに感染している人たちがばかりなんだから、自分だって感染したに違いないと思って。

で、エイズの検査を受けに行った時に、神様とやっぱり会話するわけです。結果を待つ間ドキドキしながら神様と会話するわけですよ。もし感染してなかったら、これからほんとうに一生懸命生きてますと。アラウージョさんたちがいつも言っていますよね。俺たちは毎日一生懸命生きてるんだよって。そしてもし感染していたら、そしたら神様お願いします。自分に一生懸命生きるだけの時間と勇気を与えてくださいと。

で、その話をすると彼はいつも笑うんです。おまえは感染してないのにすぐそういうふう言うんだなと。(笑) でも、それが自分が27歳、28歳のときのことで、毎日一生懸命生きなきゃいけないってことをそんな風に27歳、28歳のときに彼らから頭に叩き込まれたことが、あれから25年たって人生を振り返って本当に大切なことだったなと思います。学生の皆さんにも、今日彼からそういうメッセージを受け取ってもらえたらうれしいと思います。アラウージョさんが、生きるのが大好きだと言ったじゃないですか、生きるのが大好きだと思って今から20年間、30年間を生きる人と、なんとなくその時間を生きる人とは、50歳になったとき自分の人生を振り返ったときに全然違うと思うんですね。彼の話が久しぶりに聞くことができて、そういう思いで非常にうれしかったです。どうもありがとう。(拍手)

ということで、みなさん長いことどうもありがとうございました。最後に大きな拍手をして終わりにしたいと思います。(拍手)
(了)



ph1



ph7



ph5



ph8



ph6



ph9



ph2



ph10



12月1日は世界エイズデー
STOP AIDS
 エイズに関する電話相談 0120-177-812
厚生労働省・公益財団法人エイズ予防財団 エイズ予防情報ネット: <http://api-net.jp/aip/>

ph13



ph3



ph11



ph14



ph4



ph12



ph15